

□ レコード (CD&DVD)

諸石幸生

2020年の音楽界は、「新型コロナウイルス」の感染拡大により、ありとあらゆる分野で甚大なる被害を被った。まず、「3密」を避けなければならない、公演は延期・中止すべきかを迫られていた。そうした中において、今出来得るあらゆる工夫をし、大きな決断と決行を行った公演も出てきた。その一つが、滋賀県大津市にある、びわ湖ホールプロデュースオペラ、ワーグナー作曲《ニーベルングの指環》の最後となった『神々の黄昏』であった。残念ながら無観客上演、無料ライブ配信とはなったものの、大きな反響を呼んだのである。その後、多くの音楽家やオーケストラなどが配信に活路を求め出してきており、ある演奏家は、動画サイトに公式チャンネルを開設。無料動画の好評を受け、有料コンサートを始めている。これにより、実際のコンサートより若い層を開拓できていると分析、コンサートとオンラインの両方の展開を見ている。しかも、歌手の表情やピアニストの手元が見えるカメラアングルなど、ひと味違う楽しみも味わえた、との声も集めている。また、「自粛呼びかけの中で、オペラを初めて見た。興味を持った。次は劇場での上演を見たい」との意見も聞かれた中で、公演実績を積み上げ、音楽の価値を再認識してもらういい機会になったら、との前向きな提案もでてきている。中止、休止から一歩前へ進み出した歩みは、制約の中で、質の高い演奏をどう届けるか、コロナ禍において、音楽家も公演継続に向けて奮闘しはじめ、模索を始めたのである。何故、「レコード」の年間報告に、公演の動きについて述べているのかというと、世界が「ウィズ・コロナ」社会にシフトを変え、今できること、今こそやるべきことへの姿勢が浮き彫りになってきたことであった。その結果として、CD発売が増えたとみられるのである。コロナ禍における制約を受けた中で、改めて作品に真摯に向う演奏家たちの、音楽で表現する願いや希望、そして祈りが込められた作品の数々が印象的であった。

さて、それではここで例年のように「レコード芸術」誌の「レコード・イヤーズブック2021」を参考にしながら昨年2020年のクラシックのCDの販売状況を精査してみよう。

	新譜	旧譜 (再発)	計
交響曲	233 (153)	66 (66)	299 (219)
管弦楽曲	83 (57)	35 (16)	118 (73)
協奏曲	124 (102)	39 (44)	163 (146)
室内楽曲	148 (54)	35 (43)	183 (97)
器楽曲	255 (149)	44 (89)	299 (238)
オペラ	29 (55)	18 (51)	47 (106)
声楽	77 (—)	13 (—)	90 (—)
音楽史	47 (—)	7 (—)	54 (—)
現代曲	35 (—)	0 (—)	35 (—)
その他	57 (—)	12 (—)	69 (—)
総計	1088 (570)	269 (309)	1367 (879)

それでは、次に2020年度、第58回「レコード・アカデミー賞」の受賞作を見てみよう。

【大賞】は、交響曲部門で「ベートーヴェン：交響曲第9番《合唱》、合唱幻想曲」

パプロ・エラス＝カサド (指揮)、フライブルク・パロック・オーケストラ

クリスティアン・ベザイデンホウト (フォルテピアノ/合唱幻想曲)

1977年生まれ、スペイン・グラナダ出身の指揮者、エラス＝カサドの指揮は、ベートーヴェンの最後の交響曲を前にしても、些かも身構えることもなく、作品を慈しむように再現している。しかも、ピリオド楽器オーケストラの生命力を解き放つ演奏は、新世代の「第9」を予感させて見事である。また、南アフリカ出身でフォルテピアノのベザイデンホウトを迎えて、名曲「第9」その基となった「合唱幻想曲」を聴けるというのも興味深い。2人はすでにベートーヴェンの5つのピアノ協奏曲を録音しているし、この曲が初演された1808年とは、ベートーヴェンが演奏家として聴衆の前で演奏した、最後の機会だったとされており、ベザイデンホウトの演奏は敬意に満ちた、また一段と説得力に溢れた意欲的なものであった。

【大賞銀賞】は、声楽曲部門で「ヘンデル：《セメレ》HWV58」サー・ジョン・エリオット・ガーディナー (指揮)、モンテヴェルディ合唱団

この作品は、手兵モンテヴェルディ合唱団&イングリッシュ・パロック・ソロイストによる『セメレ』である。ガーディナーにとって、約40年振りの再録音だったと思われるが、オラトリオではなくオペラとして聴いたほどである。それは、場面によっては当日の観客のざわめきや笑い声といったものに誘われて、あくまでも自然に行われていたものであり、作品の完成度は高い。

【大賞銅賞】は、管弦楽曲部門で「ファリア：バレエ音楽《三角帽子》、バレエ音楽《恋は魔術師》」

パプロ・エラス＝カサド (指揮)、マーラー室内管弦楽団
最高レベルのファリア2作品。エラス＝カサドは「ファリアの音楽は、感傷主義や民族性を偏重する解釈から解放された時に花開く」と語るが、熱く強烈な演奏は衝撃的であった。

奇しくも、この時のレコード・アカデミー賞では、1977年生まれのエラス＝カサドというスペインの若手指揮者が注目されたのである。こうした現象は珍しいものではなく、ことにアカデミー賞においては、昨年まで連続して受賞していた1972年生まれのギリシャ出身のテオドル・クルンティスの例を挙げるまでもないであろう。二人の間は、5年と違わない。しかも、二人はこれまで、何の接点もなく演奏活動を繰り広げていた。ところで、日本のレコード・アカデミー賞の委員会では、過去にクルンティスを4回も挙げてきたし、実績があるのである。そんな日本の委員会が出した結論が、エラス＝カサドだったのである。これは全体として見れば、小さな指摘になるのかも知れないが、後に大きく話題になるとと思われる。それほど、当年43歳という若さのエラス＝カサドの才能は、凄いいということである。